

地域資源としての近代化遺産の保存活用の課題

－須坂市米子鉱山を事例に－

齋藤讓司

キーワード：近代化遺産、保存活用事業、同窓組織、米子鉱山

I はじめに

今日、日本の各地では、地域活性化の名のもとに景観保存の取り組みがなされ、様々な資源が「発見」され、保存の対象とみなされている。かつて、1970年代にブームを起こした伝統的文化の再評価は、古い街並みや自然を残す地域に多くの観光客を導出した。これらの地域は、主に近世以前の建物が残存している地域で、例えば岡山県倉敷や長野県妻籠、岐阜県馬籠が有名である。しかし、21世紀を迎え、世間のあらゆる所で技術革新が進む中で、日本の近代化に大きく貢献した明治期以降の産業とその遺構に注目が集まっている。

明治期以降、日本の近代化を支えた建造物の総体を近代化遺産と捉え、近代的な技術を使用した鉱山や、蒸気機関を動力とする工場、大量輸送のための鉄道など、具体的な建造物が遺産として保存されるようになった。しかし、清水（2003）は近代化遺産を「日本の近代の人たちの営みや生業を示す事物」と捉え、建造物だけでなく、そこで働き、生活をする人々の営みも近代化遺産に含まれると指摘している。欧米では、人々の生活の跡を残す取り組みが活発に行われている。日本において、近代化遺産として古い建造物を再評価し、保存しようとする動きは1990年代後半から始まり、1996年の文化財保護法の改正により近代化遺産の保存が活発化した（岡田、2003）。また経済産業省は、近代化遺産を地域活性の有用手段とす

る観点から、2007年に「近代化産業遺産群」を選定し、66件の遺産群と1,115件の個々の認定遺産を指定した。

これに伴い、近代化遺産を対象とした地理学的研究も行われるようになった。今井（2007）は群馬県の富岡製糸場を事例に、工場施設や原料繭の供給地を背景とした富岡の性格を考慮した上で、世界遺産登録への課題を提示した。大島（2008）は栃木県の足尾銅山を事例に、公害対策と国や県の緑化事業、NPO や学校による環境学習など、近代化遺産が単に古い建造物であるだけでなく、数々の地理学習の要素を併せ持った総合資源であると述べている。また、奥野（2003）は日本の鉱業関連の博物館や鉱山観光について触れた上で、長崎県の池島や松島をはじめとする炭鉱島の保存活用の現状についてまとめている。

これらの研究は近代化遺産としての建造物に着目し、その活用や観光化、世界遺産への登録に注目した研究である。先述の通り、近代化遺産には当時の人々の営みが背景にある。近代化遺産の保存には建造物を保存するだけにとどまらず、建造物を含めた地域や生活の営みを保存し、後世に語り継ぐ必要がある。それには地域の人々が近代化遺産の意義をよく理解し、地域を象徴するものであると自覚しなければならぬ（青木、2007）。つまり、地域の人々が近代化遺産の保存活用を通じて自己のアイデンティティを確立することが必要である。

そこで本研究では、長野県須坂市に存在した米子鉱山を事例に、鉱山に対する人々のアイデンティティに注目し、近代化遺産としての米子鉱山の保存の可能性について考察する。まず、米子鉱山の歴史的展開に触れた後で現在の鉱山跡について概観する。次に、散在する資料を整理した上で、鉱山集落の状況を可能な限り復元し、鉱山関係者から当時の生活の様子や、鉱山跡の保存活用への思いを聞き取り調査から分析する。そして、米子鉱山の保存活用における鉱山関係者と行政の取り組みについて整理し、保存活用への可能性について考察する。

II 米子鉱山の歴史的展開

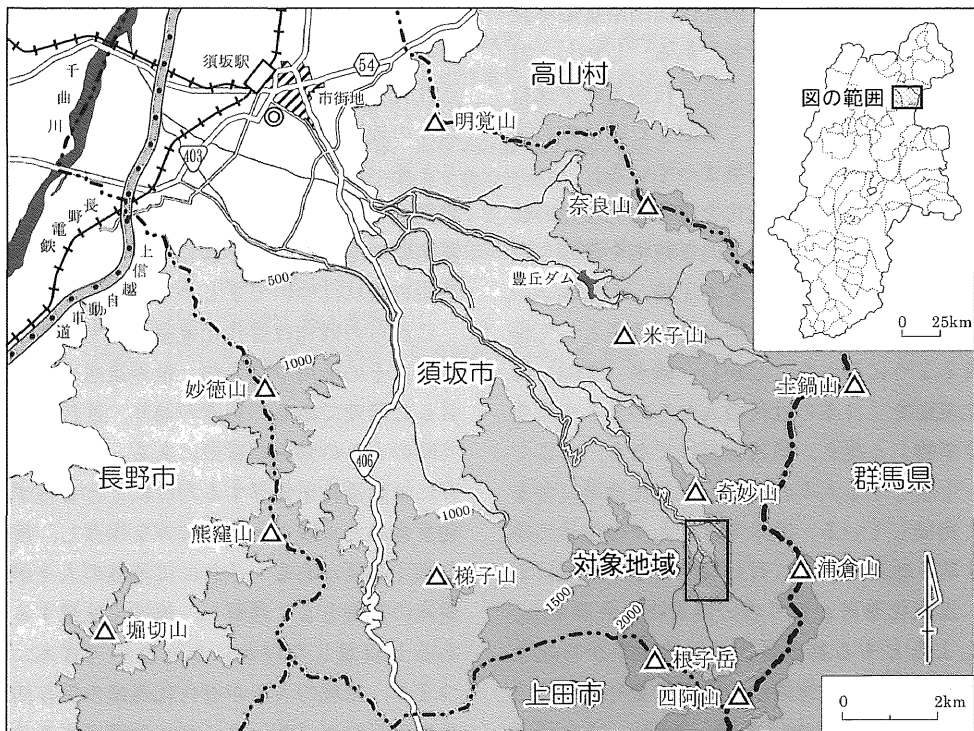
米子鉱山は長野県須坂市の南東部に広がる山間地に位置していた鉱山である(第1図)。この地域は千曲川に合流する米子川の源流にあたり、小さな沢が刻んだ谷が連続している。上流には不動

滝と権現滝があり、現在では観瀑のために訪れる人が多い。滝の麓には米子瀧山不動寺があり、かつては山岳信仰の中心としても繁栄した¹⁾。

米子鉱山は、四阿山(2,333m)をはじめ、根子岳(2,195m)、浦倉山(2,091m)など2,000mを超える山に囲まれている。これらの山々は上信越火山帯に属する四阿火山に含まれ、米子鉱山はこの火山が爆発して形成されたカルデラ内にある。四阿火山カルデラ内は、溶岩流と火山砕屑岩の互層からなる米子溶岩が堆積し、その中に硫黄鉱床が存在する(上高井誌編纂会、1964)。本格的な硫黄の採鉱が始まったのは江戸時代とされ、1973年の全面閉山まで硫黄、蠟石²⁾、ダイアスポア³⁾の採鉱が行われていた。

II-1 近世以前の米子鉱山

長野県における硫黄採掘については、713(和銅6)年の『続日本紀』に「信濃の国をして石硫黄を献ぜしむ」との記述がみられ、古くから硫黄



第1図 研究対象地域

の採鉱が行われていたことがうかがえる（上高井誌編纂会，1962）。米子鉱山に関する記録は、江戸期の文書に「米子村奥山字乳山より鷹の目と称する良質の硫黄を産し、上州への往来の人拾い取り或いは採掘し時には奪い合いさえもなすことがあって、運上を納めることもなかった」と記述されている（上高井誌編纂会，1962）。その後、1630年頃（寛永年間）には、近江国の住人、須坂村舟田五右エ門、仁礼村中川新右エ門が硫黄採掘を請け負った（竹前，1938）。さらに、1660年頃（寛文年間）には、江戸の岩崎九郎右エ門、山田屋三右エ門、米子村平吉、塩野村助六、高井野村弥勃兵衛が硫黄採掘を請け負った（上高井誌編纂会，1962）。

1700年代前半、年間10～30両程度の運上金で、米子村の竹前治郎助、竹前権兵衛、福島村の源兵衛、井上村の仁右エ門らにより経営されていたが、後半には竹前源三郎が採鉱範囲を拡大して経営を行った（竹前，1938）⁴⁾。竹前源三郎は硫黄の焼取製錬を行い、米子鉱山における硫黄製錬の基礎となった（上高井誌編纂会，1960）。1860年頃（文久年間）に攘夷の資材として500貫（1,875kg）を幕府に献上し（上高井誌編纂会，1962）、その後、採鉱の経営は竹前源三郎、藤森弥作、竹前幸吉の3者に分割された（竹前，1938）。

Ⅱ-2 明治・大正期の米子鉱山

明治期になり、近代化が進む中で鉱物資源の採鉱は法律によって規制され、米子鉱山においても検分が実施された⁵⁾。1875（明治8）年の「米子山届出書」によると、米子鉱山の面積は1万2千坪（約4万㎡）である（上高井誌編纂会，1962）。法体制が整備されていく中で経営者⁶⁾が代わりながらも、硫黄の採掘は進められた。1895（明治28）年の採掘量は432tである（竹前，1938）。1898（明治31）年からは民間出資の株式会社⁷⁾となり、硫黄採掘が行われることになった。

米子鉱山は四阿山をはじめ、2,000m級の山々に囲まれた山間地にあり、採鉱した硫黄や製錬した製品、資材の運搬がかなり困難であった。1696

（元禄9）年の文書によれば、根子岳の麓まで人間が荷を担いで運び、そこから馬で積み出していた。後年は馬から牛に変わったようである。1897（明治30）年の記録では、人間が「120人位、運搬は牛の背により日に3、40頭の牛が往復していた」と言われている（上高井誌編纂会，1962）。物資運搬の不便を解消するため、1898（明治31）年に足尾銅山で使用していた索道を米子鉱山にも導入した。索道の敷設で輸送力が増大し、硫黄の産出量も増加していく。第1表によれば、1898年における硫黄採掘量は1,008tである。

1903（明治36）年、会社の統合により信濃硫黄株式会社に再編され産出量は増加していく。特に1904（明治37）～1907（明治40）年には、日露戦争の影響で硫黄の需要が増大し、年間20,000tの採掘量を誇った（上高井誌編纂会，1962）。この頃から鉱山の施設の整備が進み、製錬所の新設、坑道内への自動式軽便⁸⁾の敷設、労働者が生活する長屋や食堂が建設され、鉱山集落が形成された。しかし、1911（明治44）年の落盤事故、1920（大正9）年の鉱山集落内での火災、1923（大正12）年の関東大地震など、相次ぐ災害によって甚大な被害を受け廃業、閉山を余儀なくされた。

第1表 米子鉱山における硫黄の採掘量と生産量の推移

年	採掘量(t)	生産量(t)
1896	432	—
1898	1,008	—
1904	20,000	—
1934	2,400	—
1936	65,288	9,311
1941	55,070	12,004
1951	15,381	2,139
1956	6,683	1,093

注1)「—」は不明であることを示す。

注2) 1934年以前の採掘量は、1俵=60kg、年間操業日数を240日として推計した。

（『上高井誌—社会編—』および『米子鉱山沿革誌』により作成）

Ⅱ-3 昭和前期の米子鉱山

1927年、閉山していた米子鉱山を大阪の資本家、石原長次により採鉱の権利が買収され、硫黄の生産が再開された(上高井誌編纂会、1962)。日本の工業体制が軽工業から重工業に移行しつつある中、硫黄の需要は増加の一途をたどり、1934年には製錬基10基、2,400tの硫黄を採掘していた。また新たな鉱床が発見され、鉱山は賑わいをみせる。この年に米子鉱山は、東京に本社を構える中外鉱業株式会社の米子鉱業所となった。第1表によれば、1936年における硫黄粗鉱の採掘量が65,288t、硫黄生産量が9,311tである(上高井誌編纂会、1960)。

1943年に索道が長野電鉄須坂駅まで延長され、同時に須坂駅には硫黄積出用の貨物が発着できる引き込み線が建設された。鉱山から須坂駅までの索道は約14kmで、246台のバケットを写真1のように索道に吊るし物資の運搬を行っていた⁸⁾。

当時の硫黄の取引価格は1tあたり90~100円であった。労働者の給料は事務職員で日当1円、採鉱や製錬に就く人で2~3円であった(山上、1981)。一般の給料が日当60銭程度の時代であり、硫黄は高値で取引され、鉱山労働者の所得がかなり高かったと言える。人々は仕事を求めて鉱山に上がり、生産された硫黄は須坂の経済を支えてい



写真1 索道とバケット

注) 索道に吊るされたバケットには採鉱した硫黄の他に、生活物資や労働者に支給する給料も積まれた。(米子・小串鉱山歴史保存活用実行委員会(2008)より転載)

た。

Ⅱ-4 第二次大戦後の米子鉱山

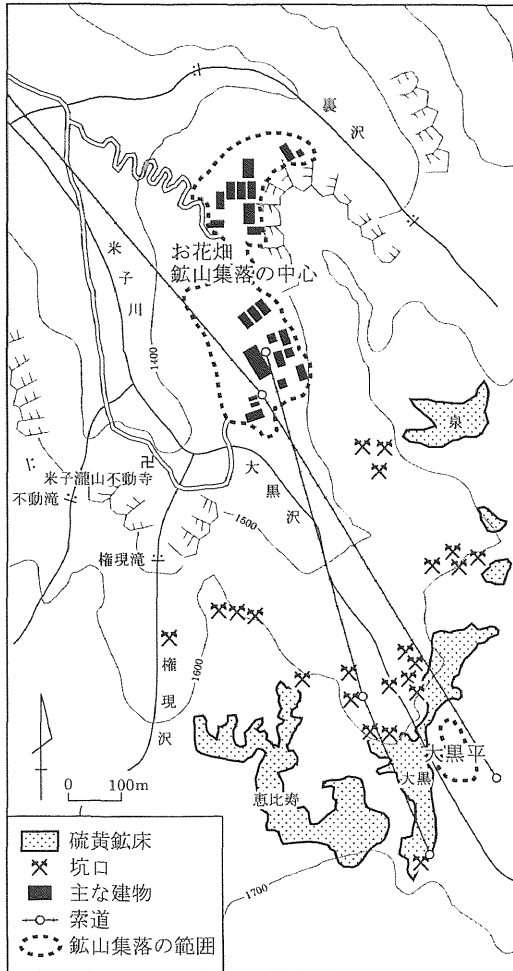
第二次大戦が本格化すると、「鉱山整備令」が発令され1944年に硫黄の採鉱が休止された。硫黄の採鉱が休止になったことで多くの労働者が山を下りたが、米子鉱山では軍需を賄うため褐鉄鉱の採鉱や薪炭材の生産が行われた。また、1945年には蠟石とダイアスポアの鉱床が発見され、硫黄以外の鉱石の採鉱が続けられた(米子・小串鉱山歴史保存活用実行委員会、2008)。

戦後、再び硫黄の需要が高まると、硫黄の採鉱が再開された。1950年には製錬場が新設された。第1表によれば、1951年における硫黄粗鉱採掘量は15,381t、硫黄生産量は2,139tであり、他に蠟石粗鉱採掘量が3,775t、蠟石生産量が3,341t、ダイアスポア生産量が231tであった。生産品は、索道で須坂駅に搬出され、須坂駅から硫黄が岩国や福山の化学工場、蠟石とダイアスポアは岐阜県内の窯業工場へと出荷された。硫黄の取引価格は1tあたり3~5万円であった。しかし、1955年頃から石油需要の増加におされ、取引価格は1tあたり1~2万円まで下落してしまった。価格の変動に合わせ経営規模を縮小してきたが、1960年に硫黄鉱山は閉山した。その後、蠟石とダイアスポアの採鉱は継続されたが、1973年に米子鉱山は完全閉山した。

Ⅱ-5 閉山後の状況

ここでは、現在残されている資料をもとに、1955年頃の米子鉱山と鉱山集落の位置関係を論じる。米子鉱山は四方を山で囲まれ、標高が高く狭隘な地域に位置している。1955年頃の米子鉱山と鉱山集落の状況を第2図に示す。

硫黄の採鉱を行う地域は標高1,600~1,700mに位置しており、急峻な山の斜面に、これまで21の坑口が開かれた。鉱床には大黒、恵比寿、泉の名前がつけられている。大黒^{だいこく}鉱床上の狭隘な平地は大黒平と呼ばれ、鉱夫のための社宅や浴場、売店が立地していた。閉山後、各施設は取り壊され、



第2図 米子鉱山と鉱山集落 (1955年頃)
 (「米子・小串鉱山歴史記録集」, 「米子鉱山見学会資料」,
 5万分の1地形図「須坂」により作成)

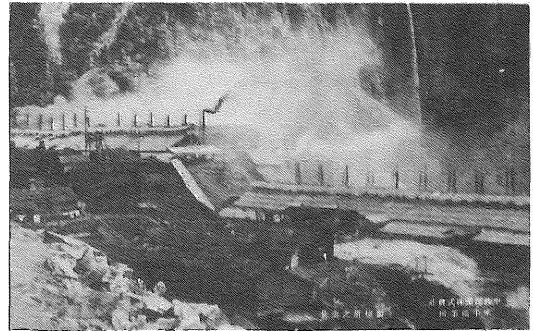
松が植林されたため、現在は森林地帯となっている。坑口は閉山後に入口を密閉する予定であったが、調査の結果、地盤や土壌に十分な強度がなく、完全密閉は不可能となった。そのため、土壌流出を防ぐ目的で積極的に植林が行われた。現在でも大黒平周辺から大黒沢を経て、米子川に微量の酸性水分が流出しており、河床の一部が赤く変色している。

鉱山集落は標高1,400~1,500mに位置する平地に立地し、事務所や診療所、学校、社宅、浴場、売店が密集していた。この地域はお花畑と呼ばれ

ており、硫黄の採鉱場とは2本の索道で結ばれていた。製錬場もここにあり、上で採鉱された硫黄は索道でお花畑まで下ろされ、製錬されていた。索道は須坂駅まで続いており、製錬された硫黄は再び索道で須坂駅まで運ばれた。大黒平と同様に閉山後、すべての建物は取り壊されてしまい、一部に建物の礎石が残っているものの当時の面影を見ることはできない。また、斜面の崩落を防ぐため、1984~1989年にかけて覆土を行い芝が植えられた⁹⁾(写真2)。

礫石とダイアスポアの採鉱を行う地域はお花畑から索道を須坂駅に向かい約500m下った位置に

a) 1940年



b) 2010年



写真2 お花畑の景観

注) 1940年と2010年における同地点の景観比較。両写真の右側に権現滝が見える。鉱山関係施設はすべて取り壊され、跡地には覆土の後に芝が植えられた。

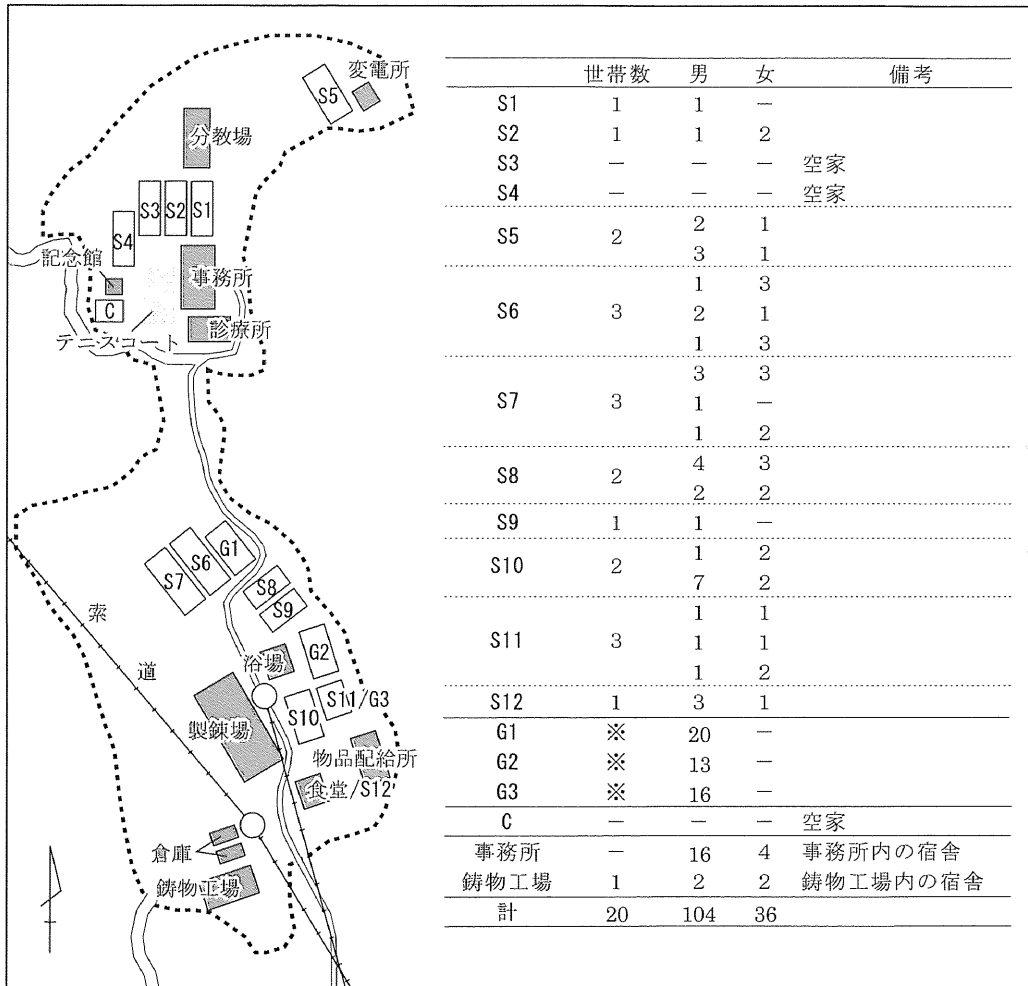
(a) 米子・小串鉱山歴史保存活用実行委員会 (2009) より転載、b) 2010年5月 齋藤撮影)

あり、採鉱事務所と社宅が立地していた。当初は露天掘りを行っていたが、採鉱し尽くした後は坑道を掘り、鉱脈にそって50m程度地下まで掘り下げた。地下で採鉱した鉱石はトロッコに乗せてワイヤーで地上へ上げていた。蠟石、ダイアスポアの採鉱場も閉山後は取り壊され、原形を留めていない。

Ⅲ 米子鉱山集落の景観と生活—戦後期を中心に

Ⅲ-1 米子鉱山集落の景観

米子鉱山では、明治期以降に本格的な硫黄の採掘が始まって以来、鉱山集落の形態が変化し続けてきた。中外鉱業の米子鉱業所となり、最盛期をむかえた1940年頃には、事務所や製錬場が立地していたお花畑だけでなく、鉱床に近い大黒平にも



第3図 鉱山集落の状況と居住者数（1955年頃）

注1) 建物の番号は便宜的につけたものである。

注2) 「S」は世帯用社宅を示す。

注3) 「G」は単身者用合宿を示す。

注4) 「C」は所長用社宅を示す。

注5) 「—」は居住していないことを示す。

注6) 「※」は単身者用合宿であるため、世帯数は記載していない。

(国勢調査および「米子・小串鉱山写真集2008」により作成)

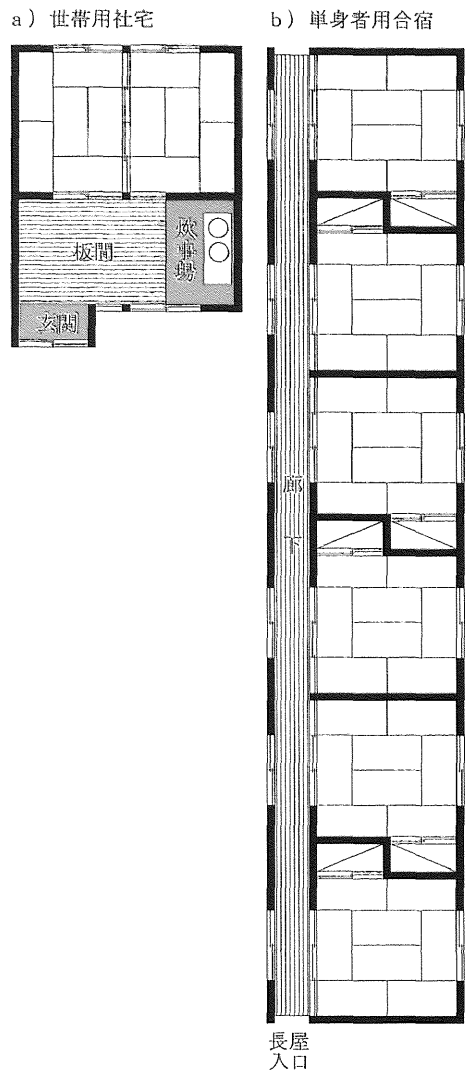
社宅や売店、浴場が設けられていた。さらに坑口の周辺には採鉱に従事する鉱夫の合宿が数棟立地していた。その後、第二次大戦の影響で一時的に休山するが、戦後に硫黄の需要が増加したことで1950年代に製錬所が新設され、硫黄の生産が再開された。本稿では、戦後に再び繁栄した1955年頃の鉱山集落の状況について論じる（第3図）。

鉱山集落の中心であるお花畑は、北部と南部に分かれて施設が集積している。北部には事務所¹⁰、診療所、仁礼小学校米子分教場、記念館が立地していた。また、鉱山全体に電気を供給する発電所がお花畑の最北部に立地していた。事務所の西側には娯楽施設としてテニスコートが設けられていた。米子鉱山は東京に本社がある中外鉱業の鉱業所であり、鉱業所長は東京の本社から派遣されていた。その為に、テニスや映画、芝居といった当時の最先端の文化や施設が取り入れられていたという。

仁礼小学校米子分教場は、家族で鉱山集落に居住する児童のために開校された。また鉱山では夫婦共働きの場合も多く小学校の学年に満たない子のために託児所のような施設も併設されていた。1940年頃に分教場に通学していた方によれば、教員は2名、クラス数は1つで児童は20～30人程度であった。分教場では年に1回、運動会が開催され賑わいをみせていた。しかし、児童数の減少により分教場での運動会は中止となり、麓にある仁礼小学校において合同開催されることになった。

南部には硫黄の製錬場や鋳物工場、備蓄用の倉庫の他に鉱夫用の食堂、共同浴場、物品配給所（売店）が立地していた。売店で物の購入に現金は不要で、すべて給与から自動的に精算されていた。また採鉱場と須坂駅を結ぶ硫黄や物資運搬用の索道の中継場があった。

鉱山集落の社宅には家族で居住する世帯用社宅と、男性の単身労働者が共同生活する単身者用合宿の2種類があった（第4図）。世帯用社宅と単身者用合宿はいずれも平屋造りの長屋で1棟が6～10部屋に区分けされていた。世帯用社宅は畳敷きの6畳が2間の他に板間と炊事場があるのが基



第4図 鉱山集落の社宅の間取り
（聞き取り調査により作成）

本であった。単身者用合宿は長屋を横断する廊下に面して6～8畳の部屋が連続しており、一部屋に4～6人が居住していた。また合宿は職種によって棟や部屋が区分けされていた。

北部には6棟の社宅が立地していた。そのうちの1棟は所長や課長など、本社から派遣された所長用社宅で、残りの5棟は世帯用社宅である。1955年の国勢調査によれば、S1とS2に1世帯ずつ、S5に2世帯が居住し、他の2棟と所長用社宅は空家である。南部には8棟の社宅が立地して

いた。世帯用社宅が5棟、単身者用合宿が2棟、世帯用と合宿の共同社宅が1棟である。また食堂にも世帯用社宅が併設されていた。同調査によれば、S6, S7, S11に3世帯ずつ、S8に2世帯、S9とS12に1世帯ずつが居住し、空家はない。単身者用合宿には、G1に20人、G2に13人、G3に16人が居住していた。その他に事務所に併設された事務所員用の宿舎に20人、鋳物工場内の宿舎に1世帯が居住しており、1955年時点の鉾山集落居住者は20世帯、男性104人、女性36人である。

Ⅲ-2 米子鉾山での生活－鉾山関係者のライフパス分析

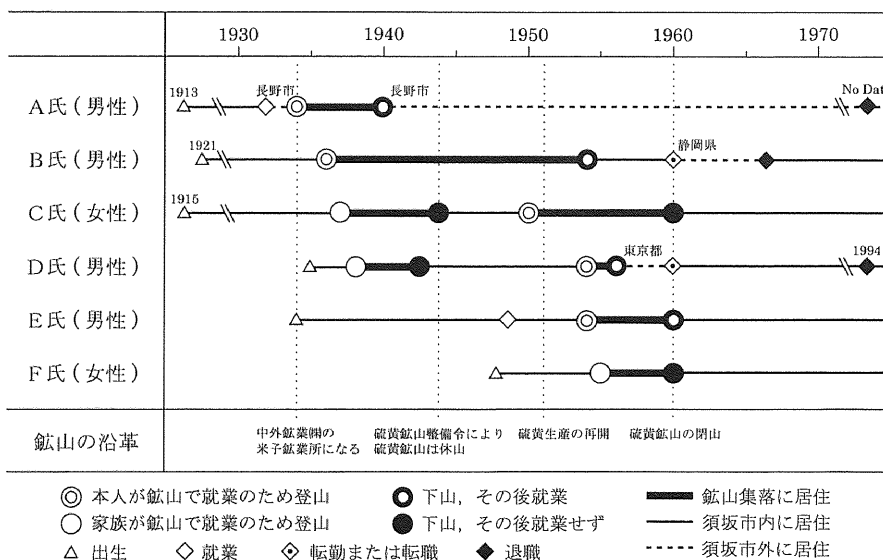
米子鉾山は1960年に硫黄鉾山が閉山し、1973年に完全閉山した。そのために当時の鉾山労働者や、鉾山集落の元居住者は現在、高齢化が進行している。鉾山の状況を現在でも把握している人はかなり限られるが、ここでは、鉾山関係者からできる限りの聞き取り調査を行い、彼らのライフパスに注目しながら鉾山での生活の状況を述べる。聞き取り調査を行った鉾山関係者のライフパスを第5図に示す。

1) 事例1：A氏（男性）

A氏は須坂市の出身である。1932年、19歳で長野市内の企業に就職した後、1934年から鉾山で事務職員として就業した。しかし、体調不良のため1940年に下山し、再び長野市内で就業した。

2) 事例2：B氏（男性）

B氏は須坂市の出身で、1936年に中外鉾業に就職した。そして同時に鉾山へ上った。鉾山集落での居住期間は1954年までの18年間で主に事務所員として働いていた。その後は下山し、須坂駅で製錬された硫黄の積出業を行った後、1960年の硫黄鉾山閉山と同時に静岡の事務所へ転勤した。1966年に中外鉾業を退職したのを契機に出身地の須坂に戻ってきた。B氏は鉾山関係者の中でも鉾山での生活期間が長い。また事務職の他、索道係や工作係にも就いていたため、鉾山全体の状況を鮮明に把握している。B氏によれば第二次大戦前後には硫黄の需要が多く、鉾山全体で約1,000人の労働者が働いていたという。特に採鉾に従事する鉾夫は合宿で共同生活を行い、合宿の数は10棟以上に及んでいた。鉾山の労働者は約3分の1が須坂出身者であった。その他の労働者には農閑期の出



第5図 米子鉾山関係者のライフパス

(聞き取り調査および「米子山カンテラ会会報」により作成)

稼ぎ労働者が多く、特に東北地方からの出稼ぎが大半を占めていたという。

米子鉱山の労働者は大きく2つのグループに分けられる。一方は中外鉱業の社員や関係者のグループ、他方は出稼ぎのような期間限定の労働者で「クミ」または「シタウケ」と呼ばれるグループである。中外鉱業の関係者は須坂市出身者が多く、身元がはっきりしているが、「クミ」「シタウケ」は主に採鉱を担当しており、その中には素性を明かすことができない犯罪者も含まれていたようで、属性がはっきりしない人も多かったという。そのため、採鉱に関わる労働者の正確な人数が不明であったという。

3) 事例3：C氏（女性）

C氏は須坂市の出身で、1937年に結婚をきっかけに夫が働く鉱山へ上った。その後の7年間を鉱山集落で生活していたが、C氏自身は鉱山で働いていなかった。1944年に第二次大戦の影響で鉱山が休山になると夫婦で下山した。戦後、硫黄生産が再開される1年前の1950年に再び夫婦で登山した。2回目の鉱山での生活では夫婦共働きとなり、C氏は硫黄の荷造りをする仕事に就いていた。鉱山集落に家族で生活していた人の多くは夫婦共働きをしていた。そして1960年の閉山で下山し、現在は須坂市内に居住している。

4) 事例4：D氏（男性）

D氏は須坂市の出身で、父親が鉱山で働いていた。そのため、D氏が3歳になった1938年に鉱山に上り、鉱山が休山になる1年前の1943年に下山した。D氏は小学校の低学年の時期を鉱山で過ごしており、鉱山にあった仁礼小学校米子分教場に通っていた。戦後、鉱山での硫黄生産が再開し、高校を卒業した1954年に中外鉱業に就職し、事務所員として鉱山で働いていた。この時、父親も鉱山で働いていたが、父親は薪炭材の伐採に就いていたため、一緒には生活していなかった。D氏は事務所に併設された事務所員用の宿舎で生活していた。事務所員用の宿舎は6畳1間で、事務所の

1階と2階に15部屋程度あったという。1部屋に1～2人で居住しており、当時の事務所員数は20人程度であったという。D氏が鉱山に勤めていたのは2年間で、1956年には東京で公務員に転職した。その後、1960年に須坂に戻り、再び転職し、須坂市内で定年まで働いた。

5) 事例5：E氏（男性）

E氏は須坂市の出身で、父親と伯父が索道係として働いていた。E氏は中学を卒業後の1949年に須坂市内で電機関係の仕事に就いた。ここでは鉱山で使用する電機も扱っており、製品を鉱山にも卸していた。鉱山へ上ったのは1954年である。きっかけは、鉱山の電機係が怪我をしてしまい、その補完が必要であったからである。E氏が居住していた場所は鉱山集落の最北部にあった変電所で、4畳半の部屋で生活していた。1958年からは新たに採掘が始まったダイアスポアを掘る採鉱夫になり、1960年まで鉱山で生活していた。ダイアスポアの採鉱場は鉱山集落よりも500mほど下った位置にあり、鉱山集落の中心地からはかなり離れていた。またダイアスポアの採鉱場は地下水の流入がはげしく、コンプレッサーやポンプを使って排水していた。鉱山では、電機を扱える人が少なく、元々、電機関係の仕事に就いていたE氏は貴重な人材であった。下山後は須坂市内で再び電機関係の店を経営している。

6) 事例6：F氏（女性）

F氏は須坂市の出身で、父親が鉱山で働くため、1954年に上った。F氏が鉱山で生活していたのは7～12歳までの5年間である。F氏の両親は共働きで、兄弟4人と共に世帯用社宅で生活していた。同じ社宅には10世帯程度が居住しており、子供が多かった。近所同士が親しく、ほとんどの人同士が顔見知りだったという。鉱山集落では花火大会や雑煮会など、様々な催しが開かれていた。また、正月の餅つきに使う臼や杵は共同で所有するなど、鉱山集落が一つの家族のようだったという。1960年に閉山と同時に下山したが、かなりショッ

クであったという。F氏は下山後、現在まで須坂市内に居住している。

米子鉱山は第二次大戦中の1944年に一時休山となったため、ライフパスはこの時期を境にして3タイプに分類できる。第一が休山前まで鉱山で就業、生活し、下山後は鉱山に戻らないタイプである。第二が休山前まで鉱山で就業、生活し、一度下山した後、再び鉱山に戻るタイプである。第三が戦後、鉱山が再開した後に鉱山で就業、生活するタイプである。鉱山集落で居住していた期間は5～10年で、本人が鉱山で就業するために鉱山集落で生活していた場合と、家族の就業のため幼少期に鉱山集落で生活していた場合がある。家族で鉱山集落に居住している場合、夫婦共働きであることが多い。鉱山集落での生活期間は長期的ではないが、F氏が語るように鉱山集落内では近所付き合いが頻繁で、良好な社会関係が築かれていた。

IV 同窓組織の結成と鉱山跡の保存活動

IV-1 鉱山関係者による同窓組織の結成—米子山カンテラ会

米子鉱山は1960年に硫黄鉱山が閉山し、これを契機に鉱山集落の居住者は全員下山した。鉱山で生活していた人々の多くは須坂市の出身で、下山後も須坂市内に居住する人が多かった。それぞれの居住地が分散した後も、鉱山で生活を共にしたという同窓意識は強く、頻繁に親睦会が開催されていた。その中から、米子鉱山に関係していた人々との親睦をより深めようと、B氏が中心となって1979年に「米子山カンテラ会」を組織した。会員は米子鉱山の関係者とその家族で、会員の親睦活動、会報¹¹⁾の発行、社会貢献を目的としている。

1979年の米子山カンテラ会会員名簿によると、結成当時の会員数は350名である。主な活動は、年1回の総会・親睦会で、中には当時の生活を思い出すため、毎年鉱山跡に上る人もいた。1984年の結成5周年には鉱山跡に記念碑を建立し、毎年発刊されていた会報にも鉱山での生活の思い出が多く掲載されている¹²⁾。「米子山カンテラ会」の

活動は、かつて鉱山があり、人々の営みがあったことを風化させないよう努めるものである。

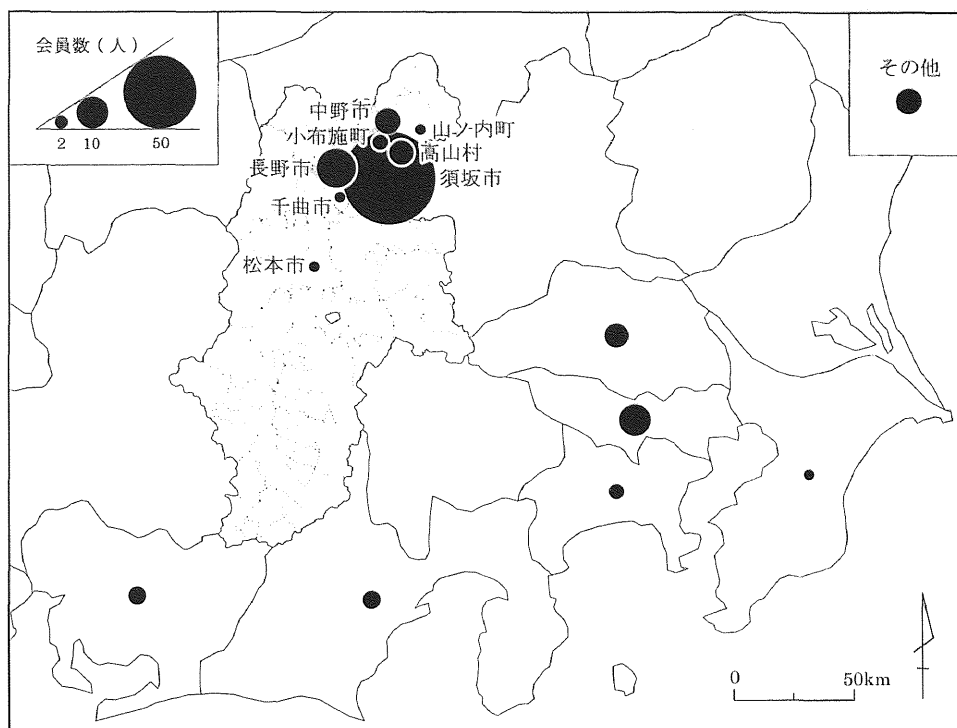
米子鉱山で働いていた人の多くは須坂市の出身で、下山後も須坂市内に居住している人が多い。そのため、米子山カンテラ会の会員も須坂市在住者が多い。現在残っている米子山カンテラ会会員名簿のうち、最新のものは1998年時点のものである。1998年における米子山カンテラ会会員の分布を第6図に示す。会員数は137名で、そのうち78名が須坂市内に居住している。次に多いのは隣接する長野市の14名、中野市の6名であり、長野県全体では108名が居住している。また、閉山後に東京や東海地方へ転勤し、現在でもそのまま居住している人もいる。その数は、東京と、隣接する3県を合わせて17名、愛知、静岡を合わせて6名である。これらの会員の中には、総会に参加し、親睦をより深めるためにわざわざ須坂に赴く人も少なくない。

「米子山カンテラ会」は、会員の高齢化が進み、活動が困難になってきた。本来であれば、リーダーシップをとるB氏のような活動が後継されれば、組織は存続できるのであろう。しかし、約40年前に閉山した鉱山について知っている世代は非常に少なく、組織を後継することは難しい。また、高齢化による会員数の減少により活動資金の調達も困難な状況にある。この状況下で、「米子山カンテラ会」は1999年に解散した。

IV-2 須坂市による鉱山跡の保存活用事業

米子鉱山にあった施設は、閉山後にほとんどが取り壊されてしまった。また、鉱毒対策や土壌改良のために草花や樹木を植えた。その結果、現在ではかつて鉱山集落があり、硫黄を採鉱し、製錬していた様子はまったくうかがえない状況にある。しかし、近年の近代化遺産の保存活動の高まりから、かつて須坂の経済を支えた米子鉱山の保存と活用が注目されるようになった。

須坂市では、2005年から米子鉱山と須坂市に隣接する群馬県の小串鉱山を合わせて、米子・小串鉱山歴史保存活用事業を開始した(第2表)。



第6図 米子山カンテラ会会員の分布(1998年)
 (「米子山カンテラ会会員名簿」により作成)

第2表 米子・小串鉾山歴史保存活用事業の推移

年	月	実施事業	費用
2005	11	米子・小串鉾山歴史シンポジウム	P
	11・12	鉾山関係資料展示会	P
2006	3	「米子・小串鉾山歴史シンポジウム記録集」発刊	P
	9	小串鉾山見学会	C
	10	米子鉾山見学会	C
	10・11	鉾山関係資料展示会	C
2007	7	小串鉾山見学会	C
	8	米子鉾山見学会	C
2008	3	「米子・小串鉾山歴史記録集」発刊	C
	9	小串鉾山見学会	C
	10	米子鉾山見学会	C
	11	鉾山関係資料展示会	C
2009	3	「米子・小串鉾山写真集2008」発刊	C
	—	遊歩道の橋の架け替え	C

注1)「P」は長野県の補助金を利用した事業であることを示す。

注2)「C」は須坂市の年度内予算を利用した事業であることを示す。

(聞き取り調査により作成)

2005年度の事業は、長野県による地域振興支援金¹³⁾を利用して行われた。2005年11月に「米子・小串鉱山歴史シンポジウム」を開催し、同11・12月にかけて須坂市内のホールで両鉱山に関する資料の展示会を開催した¹⁴⁾。シンポジウムには230名が参加し、両鉱山に関する講演の他、鉱山関係者によるパネルディスカッションが行われた。シンポジウムのアンケートによれば、参加者の42.5%が須坂市在住で、61.7%が60歳以上の高齢者であった。参加者のうち、本人やその家族が鉱山で働いていた経験がある人は23.4%に過ぎない。鉱山に関係していなかった人でも、鉱山が操業していた時代に須坂市に居住していた人々が鉱山に関心をもってることがうかがえる。

2006年度事業からは須坂市の年度予算に歴史保存活用事業の予算が計上され¹⁵⁾、2006年9月に小串鉱山見学会を、10月に米子鉱山見学会を実施した。また、前年に引き続き、10・11月に鉱山関係資料の展示会を実施した。米子鉱山見学会には34名が参加し、67.6%が須坂市在住である。また、参加者の73.5%が60歳以上の高齢者である。

2007年度の歴史保存活用事業¹⁶⁾では、2回目の鉱山見学会を実施した。8月に実施した米子鉱山見学会には32名が参加し、56.2%が須坂市在住で、58.6%が60歳以上の高齢者である。この年度には、米子山カンテラ会会員と須坂市の職員による座談会の記録や、鉱山見学会の様子をまとめた記録集を発刊している¹⁷⁾。

2008年度の歴史保存活用事業¹⁸⁾では、3回目の鉱山見学会を実施した。10月に実施した米子鉱山見学会には23名が参加し、82.6%が須坂市在住で、78.2%が60歳以上の高齢者である。また、11月には鉱山関係資料展示会を開催し、鉱山関係者から収集した鉱山の写真を使用し、写真集を発刊している¹⁹⁾。

須坂市による鉱山の歴史保存活用事業が推進された背景には「米子山カンテラ会」の活動が影響している。「米子山カンテラ会」は解散後もB氏を中心に懇親会などを積極的に行っている。また、B氏は鉱山跡の保存や鉱山跡への遊歩道を整備す

るために、以前から行政に協力を求めている。その結果、歴史保存活用事業が開始され、米子山カンテラ会会員を中心とする鉱山関係者やその家族は歴史保存活用事業に協力していた。

これまでの歴史保存活用事業の中で行われたシンポジウムや鉱山見学会には須坂市在住の人が多く参加している。これらの参加者は、鉱山で働いていた人もいるが、本人は鉱山での生活の経験はなく、両親や兄弟が鉱山関係者である人も参加している。このような参加者は、「両親が鉱山で働いていたおかげで生活ができた」や「親が鉱山で働くことで家族が支えられていた」という印象を強く抱いており、その場所を自分の目で見たいという参加理由が多くみられる。また、「親が生前の時に鉱山のことを聞かされていた」り、「亡くなった父親が鉱山の職員で、働いていた場所をみてみたい」というような故人を偲んで参加する人も目立つ。

しかし、米子鉱山は硫黄鉱山の閉山から50年、全面閉山から37年が経過した。鉱山で働いていた人々はもちろん、その子である第二世代でも60歳以上の高齢者である場合が多い。第二世代の場合、本人が鉱山に関係していなくても、親や兄弟、当時の須坂市内の様子から鉱山があったことは知っている。しかし、孫にあたる第三世代以降の人々は閉山後に出生しているため、米子鉱山があったこと自体を知らない人がほとんどである。シンポジウムや鉱山見学会の参加者の多くは60歳以上の高齢者であり、鉱山を知らない若年層の参加が少ない。鉱山の記憶が後世に受け継がれず、現在では鉱山保存への市民活動がほとんど見られなくなってしまった。

須坂市による歴史保存活用事業についても、2009年度には50万円の事業予算が計上されたが、米子鉱山へ続く遊歩道の橋の架け替えに全ての費用を費やし、見学会や展示会を実施していない。そして、2010年度の予算は計上されず、事実上、米子・小串鉱山歴史保存活用事業は終了してしまった。

V おわりに

かつて須坂市に存在した米子鉾山は、製糸業衰退後の経済を支えていた。特に鉾山労働者とその家族は、平均所得よりも高い賃金を稼ぎ、裕福な生活をしていた。米子鉾山は、標高1,400～1,700mの山地に開発され、狭隘な地域に鉾山集落が形成された。公共施設や社宅が密集し、狭い地域に多くの人が働き、居住していた。その生活の中で経験した楽しい思い出や辛い思い出は、狭い地域の中で個々に共有され、ひいては鉾山関係者というアイデンティティを生み出した。

鉾山閉山後、彼らは山を下り、須坂市を中心として各地へ引越したが、鉾山関係者というアイデンティティが消えることはなかった。下山後も親睦は続き、鉾山関係者で組織する同窓組織、「米子山カンテラ会」が結成された。その中心には、強力なリーダーシップを発揮する者がおり、鉾山の記憶を現在に残すため、積極的な活動を行ってきた。

近年、近代化遺産の価値が注目され、各地で保存や活用事業が行われる中、須坂市でも米子鉾山を近代化遺産として保存活用する動きが高まり、長野県の補助金や須坂市の予算を利用し、シンポジウムや鉾山跡の見学会などの催しが行われた。このような行政の活動は、ある一時代を支え、経済発展に功績をあげた鉾山関係者のアイデンティティをより強固なものにした。そして、行政と鉾山関係者が協力し、米子鉾山の歴史保存活用事業が進められた。

現在、鉾山にあった施設は全て取り壊され、植林をした場所は森林になった。鉾山跡に行っても当時の様子を窺い知ることはできない。鉾山の様子は、写真や鉾山関係者の語りから想像するしかない。また、鉾山関係者の高齢化が進み、同窓組織の会員数が減少するにつれて、語れる者が減少し、積極的な保存活動を行うことは困難になった。鉾山の保存に積極的な若い世代の後継者は現れていない。そもそも、鉾山関係者という一集団は、鉾山が閉山した現在において、後世に継承することができない集団である。また、行政による保存活用事業も2009年度で終了した。行政としては、市民から保存活用の活動が起らない限り、鉾山の保存活用事業は終了せざるを得ないという。今後、更なる高齢化が進めば、鉾山について語れる者がいなくなってしまう。施設が取り壊され、語る者がいなくなれば、米子鉾山の記憶は歴史の中に埋もれてしまうだろう。

近代化遺産を保存し、活用するためには、行政や地域住民が遺産の意義を理解し、その遺産が地域を象徴するものであることを認識する必要がある。工場や機械、橋などの構造物を可視的に保存し、地域の象徴と捉えることも必要だが、その意義を後世が理解し、そこでの人々の営みを語り継ぐ必要がある。米子鉾山においては、可視的に保存できるものは皆無となった。そして、鉾山関係者が減少する中で、いかにして米子鉾山での営みを後世に語り継ぎ、さらに須坂における米子鉾山の意義を後世がアイデンティティとして確立できるかが大きな課題である。

[注]

- 1) 8世紀、行基により開山された。当初は大日如来を本尊としていたが、1561(永禄4)年に直江実綱らによって不動明王が安置された。不動滝と権現滝は御神体として崇められている。
- 2) 耐火煉瓦やガラス繊維の原料として使用される。
- 3) 蠟石を構成する鉾物の一つで、耐火煉瓦や埴塼の他、装飾品にも使用される。
- 4) 泉、大黒、恵美須、滝頭、沢場、和合院、屋源田の7カ所が硫黄採鉾場として開発された。
- 5) 明治期における採鉾を規制する法律には、1869(明治2)年の行政官布告第177号、1871(明治4)年の大政官布告第173号、1872(明治5)年の「鉾山心得」、1873(明治6)年の「日本抗法」がある。
- 6) 鉾山の経営者は、竹前源三郎、藤森弥作、竹前幸吉から東京出身の中北福松と石川出身の日野忠貞

に変わった（上高井誌編纂会，1962）。

- 7) 中北福松と日野忠貞が米子硫黄株式会社と須坂硫黄株式会社を設立した。
- 8) 当時、索道係に就いていた方からの聞き取りでは、8時半に須坂駅から最初の物資が鉱山に上げられ、一日中、上下のバケットとも満載であったという。また事務職員を務めていた方によれば、鉱山労働者の給料も索道を使って上げていたという。
- 9) この芝地には須坂園芸高校と地元の社会奉仕団体の協力で花壇を造園する計画がある。
- 10) 事務所は2階建てで、事務所員のための宿舎も併設されていた。鉱山に関する事務の係は、労務、庶務、会計、採鉱、用土、工作の6つで、全ての係が事務所の1階に集約されていた。
- 11) 会報は1979～1999年の間に合計21集が発刊された。会報の編集はB氏が担当し、鉱山関係者からの寄稿や鉱山での生活を撮影した写真、親睦会の様子が掲載されている。
- 12) 寄稿には鉱山関係者からの祝辞や挨拶、投稿者の近況が掲載されているが、最も多い内容は鉱山での仕事や生活に関する思い出である。特に仕事については、苦労や失敗、事故の思い出などが書かれているが「それらをみんなで乗り越えた」という団結力が強調されているものが目立つ。また生活では、近所同士の親しい付き合いや、分校での運動会、鉱山集落で行われた祭の様子などが掲載されている。
- 13) 事業予算は60万円である。
- 14) シンポジウムや展示会の様子は2006年3月発刊の「米子・小串鉱山歴史シンポジウム記録集」に掲載されている。
- 15) 事業予算は60万円である。
- 16) 事業予算は40万円である。
- 17) 2008年3月に「米子・小串鉱山歴史記録集」が発刊された。
- 18) 事業予算は55万円である。
- 19) 2009年3月に「米子・小串鉱山写真集2008」が発刊された。

【文 献】

- 青木栄一（2007）：近代化遺産のある景観。地理，52-12，15-25。
今井幹夫（2007）：富岡製糸場－群馬県富岡市－。地理，52-12，36-39。
大島登志彦（2008）：足尾銅山・足尾町の歴史と産業遺産。地理，53-4，104-109。
岡田昌彰（2003）：『テクノスケーパー同化と異化の景観論－』鹿島出版会。
奥野一生（2003）：日本の鉱業地域その後。地理，48-10，28-33。
上高井誌編纂会編（1960）：『上高井誌－社会編－』上高井教育会。
上高井誌編纂会編（1962）：『上高井誌－歴史編－』上高井教育会。
上高井誌編纂会編（1964）：『上高井誌－自然編－』上高井教育会。
清水慶一（2003）：なぜ今、近代化遺産なのか。地理，48-10，8-13。
竹前本三郎（1938）：『米子鉱山沿革誌』竹前本三郎。
中野茂夫（2009）：『企業城下町の都市計画－野田・倉敷・日立の企業戦略』筑波大学出版会。
原田洋一郎（2002）：江戸末期、神岡鉱山栃洞地区における鉱山開発の地域的基盤。地理学評論，75，41-65。
山上邦茂編（1981）：『米子山カンテラ会（第二集）会報』米子山カンテラ会事務局。
米子・小串鉱山歴史保存活用実行委員会（2006）：『米子・小串鉱山歴史シンポジウム記録集』米子・小串鉱山歴史保存活用委員会。
米子・小串鉱山歴史保存活用実行委員会（2008）：『米子・小串鉱山歴史記録集2007』米子・小串鉱山歴史保存活用委員会。
米子・小串鉱山歴史保存活用実行委員会（2009）：『米子・小串鉱山写真集2008』米子・小串鉱山歴史保存活用実行委員会。